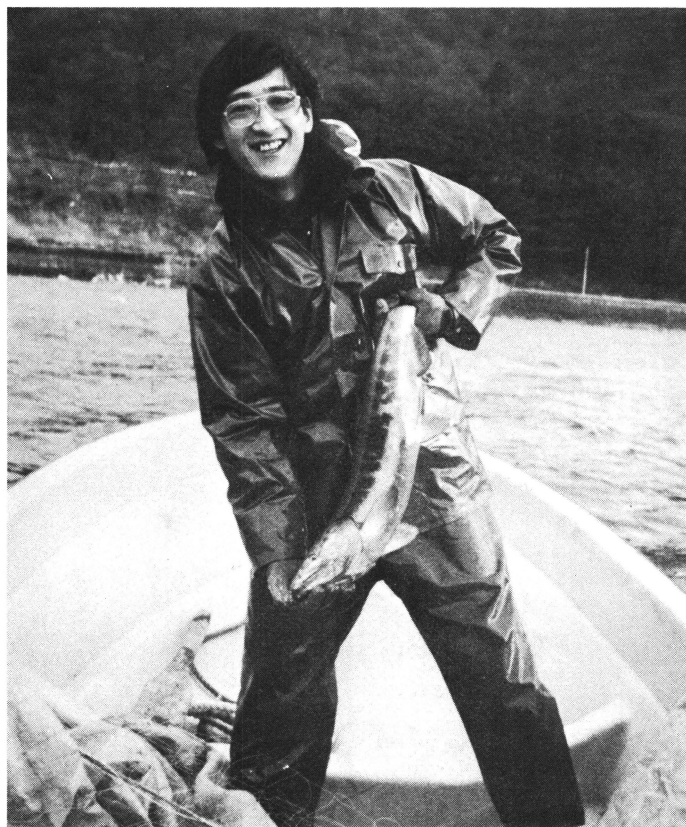


青森県水産増殖センター

センターだより

海中飼育放流サケ
回帰魚第1号の水揚げ

(昭和56年11月10日)

初春を迎えて



所長 伊藤 進

多くを申し上げる必要はなさそうです。上の写真の担当者の笑顔を見てやって下さい。

国の委託を受けて、昭和五三年以来陸奥湾内でサケの海中飼育放流試験を行なって来ましたが、過去の放流経過から、今シーズンには恐らく回帰魚があるだろうとの予想のもとに、昨年十一月九日に、放流地点である茂浦地先に試験用刺網を張ったところ、翌朝にははっちりと九尾がかかった訳です。

必ず帰って来るだろうと信じてはおりましたが、やはり若干の心配はありました。それがこの様に本当に帰って来てくれると、喜びと共に、いとおしさも一入です。その後も続々と水揚げされておりますが、詳細は本文を見て下さい。

そこで、初春のご挨拶に代えて、言わずもがなの事を申し上げたいと思います。皆の力で、陸奥湾をホタテのみならずサケの豊庫にする様に頑張ります。試験回帰魚は今年から昭和六〇年にかけて帰って来る筈です。従ってこれを親魚として、再生産体勢を確立することが肝要です。また回帰魚の採捕・配分をめぐるトラブルなど絶対に起こしたくないものです。この様にしてこそ、この試験に格別のご尽力をいただいた菅野尚氏（元東北水産増殖部長）始め、多くの関係者の方々に報いる道だろうと思います。



ホタテガイ養殖実態調査 (秋期) 結果について

ほたて貝部 平野 忠

一〇月一三・三〇日に恒例の養殖実態調査が行なわれましたので、要点を述べてみます。

【半成貝は後退】

図1は全調査個体中に占めるへい死貝・異常貝・正常貝のパーセントを調査年度別に表わしたものです。半成貝の(へい死貝+異常貝)の割合は五四年まで下降を続けましたが、最近二年間は上昇傾向にあり、今回は五〇年からの異常へい死が回復しはじめた五三年当時の状態に逆戻りしています。この原因としては調査対象貝が今までとかなり違ったことが考えられます。第一に調査員の抽出方法は最近二、三年は漁業者により港まで運搬してもらっていたのを、今回は我々調査員が乗船して無作為に沖取りする方法に改めたことが挙げられます。第二に昨年・今年と耳吊り養殖の普及により貝の成長が早くなり出荷が早まったため、いくつかの地域ではすでに五五年貝はほとんど残っていない状態で、今回調べられたのは売れ

残りの貝であるという見方もできます。

表1に、春期調査の際の異常貝出現率から秋期のへい死率を予想した値をのせました。これは五三年の春と秋のデータから作った関係式にあてはめて算出したものです。これに比べて実際のへい死率はほぼ近い値になり、種苗の質がその後の生き残りに強い影響を与えることが再認識されます。これを図示したのが図2です。

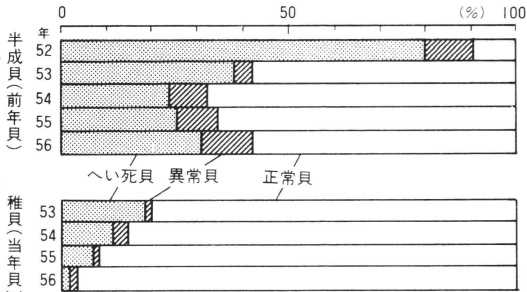


図1 半成貝と稚貝の年度別へい死貝・異常貝出現状況

表1 半成貝のへい死率の予想と実際

地区	上磯	青森	平内	上北	下北	全湾平均
5月の異常貝出現率	17.8	15.3	4.0	5.8	6.3	8.3
10月の予想へい死率	58.2	52.6	26.9	30.9	32.1	36.6
10月の実際のへい死率	63.4	55.1	19.5	27.0	47.5	30.9

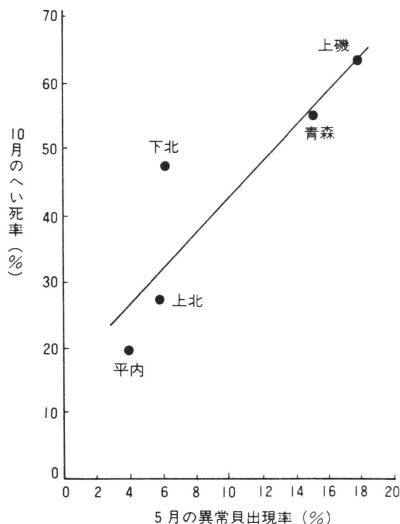


図2 地区別にみた5月の異常と10月のへい死の関係

【耳吊り過信は禁物】

養殖方法別に見ると、表2のように耳吊りがへい死貝・異常貝が少なく、成長も良い結果となっていますが、耳吊りの中にも九二%がへい死している例もあり、これは使われた種苗が劣悪だったことを物語っています。耳吊りが良いといっても全体の1/4が死んでいるのでは、まだ合格とはいえません。ちなみに、増殖センターの試験では川内四・〇%、平館四・一%となっています。

【今年の貝に期待】

一方、今年産の稚貝は予想以上に良く、図1のように五三年以来へい死・異常が低くなって来ている。

ます。

今回は養殖・地まき・その他と用途別に分けて調査したところ表2のようにその特色がよく表われました。へい死貝・異常貝は、その他用(稚貝販売・ミニホタテ用)が最も悪く、うなずける結果です。収容数は養殖用は平均値が指導の二〇個以内ですが、個々に見ると二〇個以上が1/3あり、まだ改善の余地があります。地まき用は平均値で指導の五〇個を上回っており、密着放流であれば三〇個以内と更に少なくする必要があります。を考えると、前よりはかなり改善されたとはいえ、合格点はつけられません。その他用については問題外で、このような貝を作っている内はへい死の克服はまだ遠い先の話でしょう。

表2 55・56年産貝の方法・用途別調査結果

産年	方法・用途別	へい死率	異常貝出現率	平均収容数	平均殻長	平均重量
55	丸 籠	43.0	25.9	12.5	8.3	70.9
	パールネット	46.4	16.2	14.4	8.6	77.8
	耳 吊 り	23.9	15.2	128.0	8.9	88.8
56	養 殖 用	1.9	1.3	19.2	3.3	4.3
	地 ま き 用	1.6	0.9	60.6	3.0	3.3
	そ の 他 用	5.6	4.8	81.4	2.9	2.6

ともあれ、半成貝が悪い反面、稚貝が良かったのは明るい材料ですが、これを生産に結びつけるためには、今後の管理が大切です。特に養殖に比べて遅れている地まきの安定生産のために、適期・適正密度の放流に努めましょう。

海中飼育放流 サケの回帰状況



魚類部技師 小倉 大二郎

陸奥湾内で実施して来たサケの海中飼育放流試験も今年で四年目を迎え、いよいよ本格的な回帰が見込まれる時期になりました。

このためセンターでは、海中飼育放流した茂浦、野辺地両地を始め付近の河川を重点に回帰魚調査を実施中です。このうち茂浦地先の調査についてこれまでの経過を紹介してみよう。

同地先における調査は十一月上旬より開始しており、センター前

沖の海中飼育放流地点に特採の刺し網一ヶ統(延長一〇〇m)を設置して、回帰魚の試験採捕を試みています。

採捕状況は図に示したとおりで、網設置の翌日から十二月五日までに計一五三尾が採捕されています。これら採捕魚の年令組成は三年魚九四・一%、四年魚四・六%、五年魚一・三%と三年魚の割合が断然高く、また、性比は約四対一の割合で雄の割合が高い傾向とな

っています。今季はまだ標識魚の採捕はありませんが、センター地先における過去のサケ捕獲状況は年七〜八尾程度であったとのこと、今獲れている三年魚はその殆んどが昭和五四年に茂浦地先から放流した実験群が回帰して来たものと考えられます。

みますと表の様になり、回帰の山は昭和五六年〜五九年頃となります。果して、どのような結果になるのか。今後の調査が楽しみです。調査の正確を期するため、標識魚の発見その他につきまして、皆様の御協力をお願いいたします。

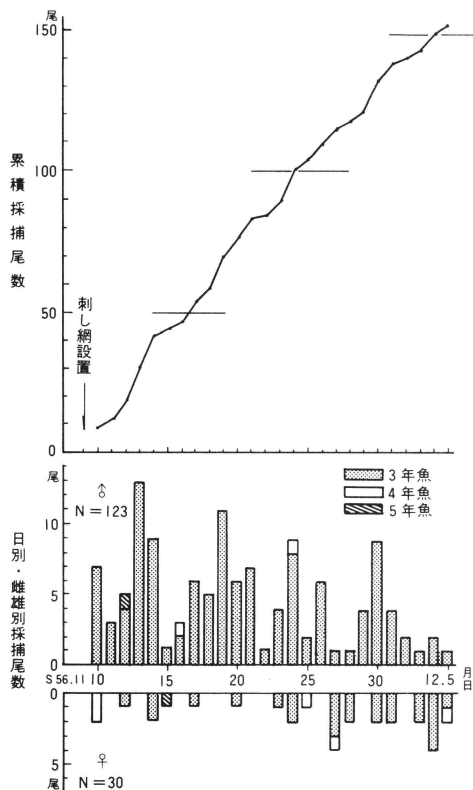


図 センター前沖におけるサケ試験採捕状況

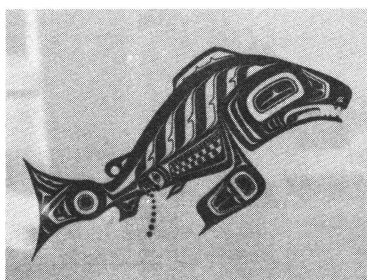
表 海中飼育放流サケの回帰予想

放流場所	放流年	放流数 (万尾)	回 帰 予 想 数 (尾)							
			昭54	55	56	57	58	59	60	計
茂浦地先	昭53	3.73	A 10	B 350	C 790	D 160				1,310
	54	190.50		A 530	B 18,000	C 40,140	D 8,000			66,670
	55	15.18			A 40	B 1,430	C 3,200	D 640		5,310
	56	98.59				A 280	B 9,320	C 20,770	D 4,140	34,510
	計	308.01	10	880	18,830	42,010	20,520	21,410	4,140	107,800
川内地先	53	1.82	A 5	B 170	C 390	D 80				640
	54	18.00		A 50	B 1,700	C 3,790	D 760			6,300
野辺地地先	55	85.25			A 240	B 8,060	C 17,960	D 3,580		29,840
	56	96.10			A 270	B 9,080	C 20,250	D 4,040		33,640
	計	199.36		50	1,940	12,120	27,800	23,830	4,040	69,780
合 計		509.19	15	1,100	21,160	54,210	48,320	45,240	8,180	178,220

A: 2年魚 B: 3年魚 C: 4年魚 D: 5年魚 ※回帰率を3.5%と仮定
 ※回帰魚の年令組成は実験卵供給河川(北海道西別川)の値から2〜5年魚で
 夫々0.8%、27.0%、60.2%、12.0%と仮定

昨年十月に、カナダ漁業海洋省のジョンストン次官補等が来青された際に、お土産として戴いたものです。その時の話では、日本における鮭鱒の増殖努力は、国・県・民間何れもすばらしいとの事でした。この絵のモチーフの様に、世界におけるサケの増殖が、大飛躍することが望まれます。

(伊藤 記)



この魚は何に見えますか？
 これはインデアンが画いたサケだそう。何サケだかって、それは判りません。尻からこぼれている球の数は、北太平洋に棲むサケの種類数を表わしているとの事でしたから、多分太平洋サケ(オウゴンクス)の化身でしょう。

下痢性貝毒と 毒化の予測について



漁場部 尾坂 康

昭和五〇年に始まったホタテガイの異常へい死は、陸奥湾のホタテガイ養殖にとって歴史的な大事件であったと言えましょう。その回復もまだはかばかしく進んでいなかった昭和五三年に、陸奥湾のホタテガイ養殖は、もう一つの新しい試練を迎えました。言うまでもなく、下痢性貝毒の発生です。以来、ホタテガイの毒化は毎年発生しており、その都度ホタテガイの出荷規制措置を余儀なくされ、これもまた大変深刻な問題となっております。

センターでは、関係諸機関と協力して、下痢性貝毒の発生原因や発生機構の究明と同時に、対策としての毒化予測の可能性などの検討を続け、ある程度の見通しがついてきましたので、今までに得られた結果の概要をまとめてお知らせいたします。

一、原因プランクトンの探索

まひ性貝毒と同様に、下痢性貝毒もまた、ある種の有毒プランク

トンが海水中で増え、これを貝が食べることによって発生するのであると想像されておりました。

このため、貝の毒化状況と、これに台わせてどんなプランクトンが発生しているのかということ

を最初に調べてみました。その結果は、図1に示したように、ディノフィシス・フォルティ(以後フォルティと略称)と呼ぶプランク

トンが、貝の毒化時期と大変よく一致して出現することが明らかになりました。また、毒化したホタテ

ガイの胃内容物を調べてみると、図1のように、毒化の程度が強い

貝の胃の中には常にフォルティの数が多いことも確かめられました。更に、東北大学の安元教授等は

フォルティを大量に集め、これをすりつぶしてマウスに注射したところ、下痢性貝毒と同じ症状でマ

ウスが死んでゆくのを確認されました。以上の様な経過により、現在では下痢性貝毒の原因プランク

トンはフォルティであることが認

められるに至りました。
二、原因プランクトンの性質
貝の毒化対策をたてるためには、原因プランクトンの性質を明らかにしておくことが大切です。

【原因プランクトンの発生時期と水温など】

図1でみられる様に、フォルティの発生時期は普通、四月から九月頃に及びますが、年により時期量は大きく変動します。その原因はいろいろあると思われるが、

は、図1に示したように、ディノフィシス・フォルティ(以後フォルティと略称)と呼ぶプランク

トンが、貝の毒化時期と大変よく一致して出現することが明らかになりました。また、毒化したホタテ

ガイの胃内容物を調べてみると、図1のように、毒化の程度が強い

貝の胃の中には常にフォルティの数が多いことも確かめられました。更に、東北大学の安元教授等は

フォルティを大量に集め、これをすりつぶしてマウスに注射したところ、下痢性貝毒と同じ症状でマ

ウスが死んでゆくのを確認されました。以上の様な経過により、現在では下痢性貝毒の原因プランク

トンはフォルティであることが認

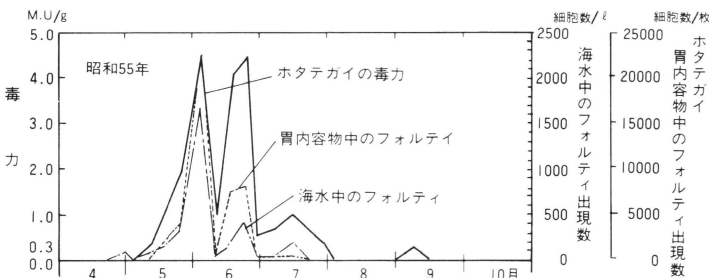


図1 ホタテガイの毒力と海水中、ホタテガイ胃内容物中のフォルティ出現数との関係

出現します。なお、塩分については、図2に示した様に、三三%前後のややあまい海水の所に多く出現します。これらのことは、後に述べる貝毒発生予測のために重要な資料となります。

【原因プランクトンの分布水深】

図3は、青森定定点で昼夜連続にフォルティの分布水深を調査した結果です。これを見ると、フォルティは昼夜に関係なく、一五〜三

最も重要なのはその年の水温の動向で、図2の様に、八〜一六℃の範囲の時期に出現しますが、特に、一〇〜一七℃程度の時に最も多く

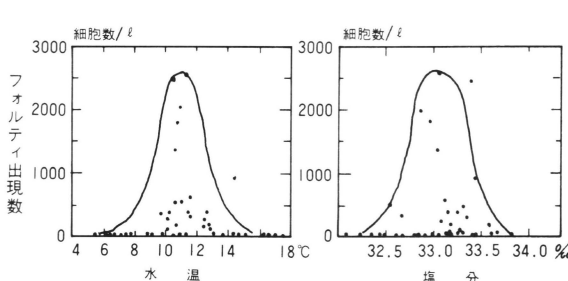


図2 海水中のフォルティ出現数と水温、塩分との関係
昭和56年 青森定定点

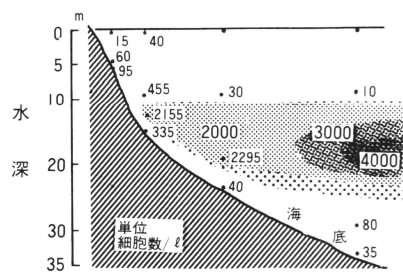


図4 沿岸域におけるフォルティの垂直分布
野辺地定定点 昭和56年7月6日調査

次に、図4は沿岸域におけるフォルティの垂直分布を示したものです。一般には、フォルティは岸

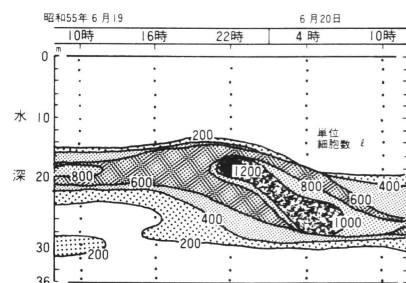


図3 フォルティ分布水深の経時変化
青森定定点 昭和55年6月19, 20日調査

〇m程度の中層から下層にかけて濃密に分布していることが判ります。ホタテガイは、丁度この程度の層に垂下されており易いのも当然な訳です。

に近づくに従って、海底勾配に沿って舌状に分布し、海底付近では数が少ないのが普通です。

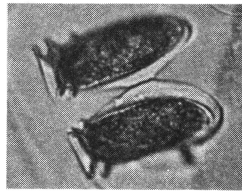
しかし、時と所によっては、海底までフォルティが濃密に分布することも起ります。その原因は、恐らくその場所の地形や、その時の風の状況などによって、フォルティの濃密な海水が海底にぶつかってくるためではないかと考えられます。一方、地まきホタテガイは、垂下養殖ホタテガイに比べて毒化しにくいのですが、時には高い毒化がみられることもあります。それは、この様な理由によるためで、決して地まき貝だからと言って安心は出来ません。

三、原因プランクトンの

起源・増殖・消滅

貝毒の調査が始まった当初は、陸奥湾内だけで調査を実施しておりましたが、最近では水産試験場等の協力を得て、青森県沿岸一帯に調査範囲を広めております。その結果、いろいろと新しい重要な事実が判ってきました。図5は青森県沿岸におけるフォルティの海域別発生状況を示したものです。これをみますと、日本海では、四月下旬には既に一リットル当り五〇〜二九〇細胞の出現があります。

この時期には、陸奥湾の中では、まだ六〇細胞以下の出現しかなく、太平洋では全く出現していません。その後、五月初旬ないし中旬になると、津軽海峡から、特に陸奥湾内における増加が顕著になります。この時期に陸奥湾内では、写真に示した様な分裂中のフォルティが、時々採集されることから、湾内で特に増殖が盛んな様に思われます。



フォルティの分裂
青森定点
昭和56年 6月8日調査採集

この様にして、六月から七月頃にかけて、各海域ともフォルティ出現のピークを迎えますが、その最高到達密度は陸奥湾の中が最も多く、次いで海峡、日本海、太平洋の順となっております。この様に海峡や陸奥湾内で高密度に達するもう一つの理由として、フォルティが海流に乗って運ばれて来る過程で、収れん・集積作用を受けて濃密になることも考えられます。その後、七月に入ると、日本海では急激に減少し始め、次いで海峡、陸奥湾、太平洋などでも減少し、

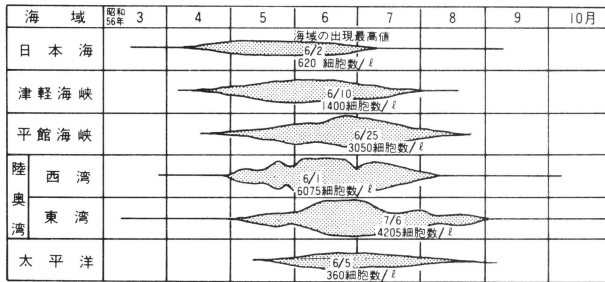


図5 各海域におけるフォルティの出現状況



調 査 地 点

八月下旬から九月上旬になると各海域とも殆んど消滅してしまいます。各海域の中でも陸奥湾東湾では消滅する時期が最も遅れると言う特徴を持っていますが、これは、東湾では海水の交換が緩慢なために、昇温が他の海域よりも遅れ、フォルティの出現期間も、

後にずれてゆくためと思われる。以上のことから考えて、陸奥湾におけるフォルティは、対馬暖流水に起源を持ち、津軽海峡、平館海峡を経て流入し、更に陸奥湾という好適な環境下で増殖し、また流入の過程において集積作用なども働き、密度が高くなるものと考えられます。

四、毒化の早期予測

貝毒の被害を最少限にとどめるための対策は、いろいろと考えられます。こうした対策の中で、私達が最も注目し、力を入れて来たのは、毒化の時期や程度を早期に予測し、これをホタテガイの生産者や加工業者に予報することです。最近、この種の予測技術も大分進んで来ましたので、その概要を述べてみます。

【水温・塩分データ等による予測】

前に述べた様にフォルティの出現時期は、海水の水温や塩分濃度と大変密接な関係がありますので、その年の水温や塩分を測定することによって予測が出来る訳です。

【原因プランクトンの発生状況による予測】

フォルティの発生状況から予測することが可能であることは言う

までもありません。特に、日本海における発生状況のデータは重要で、これをもとにすれば、ほぼ半月程度早く陸奥湾内の状況が予測できそうです。また前に述べた様に、ホタテガイの胃内容物中のフォルティの出現数と毒力との間には、密接な関係がありますので、これによる予測も可能と思われる。

【指標プランクトンによる予測】

図6は、貝毒発生時期の前後にみられるプランクトンの出現状況を示したものです。この図でみられる様に、渦鞭毛藻に属するアキユミナータ、スピニフェラと呼ばれるプランクトンが増殖して来るとこの後を追う様にフォルティも増加し、ホタテガイの毒化が始まりアキユミナータ、スピニフェラが消滅する頃には、フォルティの出現数と毒力はピークとなります。また、ミトラ、コンプレッサムと呼ばれるプランクトンが出現し始めますとフォルティ、毒力とも徐々に減衰してゆきます。このように、フォルティ以外の指標プランクトンからも毒化の予測は可能です。

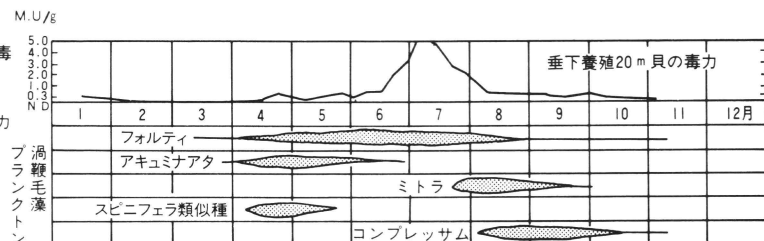


図6 主な渦鞭毛藻プランクトンの出現時期とホタテガイの毒力との関係
昭和56年 野辺地定点

【ムラサキガイの毒化による予測】

これは、ムラサキガイが、ホタテガイよりも毒を蓄積し易いという性質を利用するものです。ムラサキガイが、毒化したらホタテガイもまもなく毒化することが予測される訳です。

六、今後の課題

調査が、全国的に拡大されるに

従って、下痢性、マヒ性貝毒とも予想外に広い範囲と、多くの貝類で発生していることが判ってきています。幸い、陸奥湾では、今のところ下痢性貝毒だけで、マヒ性貝毒はまだ検出されていません。しかし、今後、絶対にマヒ性貝毒が発生しないという保障はありません。このようなことから、マヒ性貝毒の監視も並行して行うことが肝要です。

また、下痢性貝毒の毒化時期の早期予報を実用化するためには、多くの調査データを必要とします。将来は、漁業研究会などとの共同調査体制についてのご協力をお願いしたいと思います。

また、今まで述べたことの他に、貝毒の検査方法を簡易に測定できる器械分析が望まれます。現在、マウスによる検査方法で行っており、検体採集から、分析結果が出るまで早くても二日はかかります。先頃、東北大学農学部安元教授等によって下痢性貝毒の毒成分の化学構造が解明され、化学的な方法による分析も近いことが報告されました。

こうした種々の研究の進展によって、安心して養殖に取り組める日も遠くないものと考えています。

豆 辞 典

青森県海藻と呼び方

本県では有用海藻としてコンブ・エゴノリ・モヅク・フノリ等多くの海藻が採取されており、又、これらの海藻以外にも数多くのものが海に繁茂しており、その呼び方には地方によりいろいろ変ったものがあります。

今回は青森県でよく聞かれる海藻の呼び方を集めてみました。

青森県の呼び方		和名	生 態
青 藻 類	緑藻類及び顕花植物	紅 藻 類	
ミズ	アオノリ	エゴノリ	一年生の海藻でホシタワラ類にからんで生育する。
ホソメ	アサノリ	ソゴ	一年生の海藻で淡水の流入する浅所に生育する。
ダクロ	スガモ	イワノリ	一年生の海藻で、冬に岩礁上に生育する。
マコンブ	ナガモ	フノリ	スサビノリ・他
若生	アサノリ	ミミ	マクサ・他
マコンブ	アサノリ	ツノマタ	フクロフノリ
ホソメ	アサノリ	ウサバアノリ	マクサ・他
アラメ	アサノリ	アナアサノリ	ツノマタ
ガメ	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
ウスカサ	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
カミカサ	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
ナガモ	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
テツモ	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
スリモ	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
ホシタワラ	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
イワモツク	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
クサモツク	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
サルメン	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
チガイソ	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
イシモツク	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
ホシタワラ類	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（一年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十一年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十二年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十三年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十四年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十五年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十六年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十七年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十八年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（十九年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十一年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十二年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十三年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十四年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十五年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十六年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十七年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十八年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（二十九年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十年目）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十一年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十二年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十三年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十四年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十五年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十六年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十七年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十八年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（三十九年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十一年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十二年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十三年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十四年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十五年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十六年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十七年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十八年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（四十九年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十一年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十二年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十三年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十四年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十五年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十六年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十七年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十八年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（五十九年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十一年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十二年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十三年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十四年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十五年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十六年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十七年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十八年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（六十九年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十一年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十二年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十三年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十四年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十五年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十六年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十七年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十八年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（七十九年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十一年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十二年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十三年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十四年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十五年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十六年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十七年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十八年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（八十九年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十一年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十二年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十三年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十四年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十五年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十六年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十七年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十八年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（九十九年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ
マコンブ（一千年度）	アサノリ	アサノリ	ウサバアノリ

以上、和名と違った呼び方をされている種類について述べましたが、この他、和名通りのものとしてはヒジキ、マツモ、アカバ、アカハダ、アカバギンナンソウ、クロバギンナンソウ（エツノマタ）、ツノマタ、イギス類等があります。

なお、海藻の調査を実施して、その結果を報告する場合には、通常和名を使用する事になり、漁業者の方々にとってわかりにくい点もあるかと思われましたので、代表的な海藻について表示してみました。